

第53号 華山会報

令和6年11月11日
公益財団法人華山会

渡辺華山と訪甄録

熊谷市立熊谷図書館学芸員 大井 教寛



渡辺華山の天保二年の毛武の旅は、この『華山会報』でも加藤克己氏が「渡辺華山『毛武遊記』」として四六号まで二三回の連載でその足跡を辿られている。この旅は、主命を受けての三宅家譜の編纂が目的であったことは知られているが、その目的たる三宅氏の旧領であった武蔵国三ヶ尻村の地誌をまとめた報告書が『訪甄録』である。

筆者は平成二八年に、現在の群馬県桐生市と熊谷市三ヶ尻とに關係する作品・資料を中心に、企画展「毛武と渡辺華山展」を行った。その時に中心に据えたのは確認できる『訪甄録』をすべて集めて展示することであった。

企画展当時確認できた『訪甄録』は九点だったが、現在は近年発見された古澤家本（龍泉寺本の写本。数丁しか写していない）も含めて一〇点が確認できる。これらの『訪甄録』を系統立てて記すと、

- ・三宅氏本系：華山が藩主康直に上程したいわゆる正本の『訪甄録』から派生
 - ① 正本 ② 南葵文庫本 ③ 鐮木本 ④ 鈴木本 ⑤ 熊谷市立熊谷図書館本
- ・龍泉寺本系：如山と梧庵が正本を写したとされる龍泉寺本から派生
 - ⑥ 龍泉寺本 ⑦ 大澤本 ⑧ 蓮沼本 ⑨ 国立国会図書館本 ⑩ 古澤本

である。

この二系統の見分け方は二つあり、図譜中の運派塚を計測している縄の張り方と、地図中の上宿と下宿の位置関係である。三宅氏本系は縄がピンと張っていて、上宿が江戸寄り、下宿が京寄りに書かれている。龍泉寺本系は縄が弛んでいて、上宿が京寄り、下宿が江戸寄りに書かれている。また龍泉寺本系については、図譜中に如山と梧庵がそれぞれ書き写した署名も写されており、これも判別の目安になる。

これらの写本のうち、南葵文庫本は『華山会報』四六号に中村正子氏の詳細な研究が掲載されているので参照していただきたい。国立国会図書館本は群馬県史の編纂にかかる印が押されているのでその由来ははっきりしている。

写本の年代として、一番古い写本は上程前に写したと考えられている龍泉寺本（天保三年か）で、次が天保五年の記述がある南葵文庫本、③、④、⑦、⑧、⑨、⑩は近代に入つての写本と考えられる。そこで問題になるのは⑤の熊谷市立熊谷図書館本（当館所蔵本）である。

当館所蔵本は先述の見分け方から三宅氏本系の特徴を持つ。また、南葵文庫本が正本に忠実に写されているのに比して、当館所蔵本は『錦心図譜』中の正本にはある各絵図の場所名が書かれていないなどの特徴がある。特に場所名が書かれていないのは大きな意味を持つと考えられ、場所名を書かなくてもどこを描いたかわかる人物が持っていたか、場所名を書き込む前の下図はないかと考えられることができるであろう。

いずれにしても、伝来・由来を含めて当館所蔵本に関する情報、研究を進めていきたいと考えている。



運派塚の図 熊谷市立熊谷図書館本

田原藩義倉・報民倉

— 民に報いたいと願った大名と華山③ —

研究会員 石川洋一

○直書の意図の具現化を図る用人

前回藩主康直が、江戸から田原へ送った直書で述べた、「民に報い候よう致したい、私（藩主）は民の父母であり、その方（家中）共は、兄弟であり、私の本意は、その方共の本意であり、私の存念も承知しては「はずだ」という意向は、どのように実現されるのであろうか。

天保六年正月二十一日康直から義倉設立の企画、義倉の名を報民倉とする旨、少数の関係者に内密に告げられて以来、藩日記には全く報民倉のことは記載がなく、次に報民倉の名が藩日記に登場するのは、「御倉出来場見分」をする八月二十九日である。この日はいつもより早く出席し、午後年寄、用人はじめ村奉行、代官、普請方、大工、地方手代らが報民倉建設用地に見分に出掛けた。建設地が屋敷地にかかる平山忠左衛門（出府中・代人親戚平山喜太郎）と萱生源左衛門を呼び出し、敷地の

見分を行い、色々な測量などして夕刻までかかった。

報民倉建設に向かつて家中が動き出すのは、江戸から天保六年閏七月六日に田原に届いた「御直書」と「御家中江之被仰出之覚」が同年八月晦日、用人市川茂右衛門から家中に伝達されてからである。「御用人方日記」九月四日条に、次の箇条がある。最初の一つ書きは、おそらく江戸の年寄渡辺華山が康直の意を受けて書いた「御家中江之被仰出之覚」の写であり、「右の趣：」からの文末六行は用人市川茂右衛門の筆になるものであろう。

一、此度厚き思召を以済敷御取立被仰出候。乍然御勝手連年之不如意ニ而御家中さへも非常之御引米被仰出候程之儀、中々御有余無之候得共御身前御殿被遊、御手元より御元米御蔵御取立御入用等被下置、此上如何様ニも形代なりと取立不癡様被仰出候。尤御家中者ハ如何様凶年ニ而も飢渴ニ及候程様之儀ハ不相成筈ニ候得共、小祿多人数之者ハ左様ニも参申間敷候間、常々捨て候物ニ而も貯ふべき工

夫致候ハ、一段之事ニ思召候。懸日（兼日カ）御引米多之中右様之儀被仰出候得は、御家中之者如何ニも可存と御懸念も被遊候得共村奉行江御直達之旨無急度寄々拜見、御達之筋難有可奉存上候。依之一統心得之ため此段被仰出候。

右之趣支配下組下へも不洩様可被達候。右被仰出候処、口上ニ而可達処、文長き儀故、な須半切江認、去月晦日大目付心得茂右衛門席達有之事、但御直書村方へハ達候、書付ハ日記終ニ記ス。

一、右被仰出候ニ付、御用人共申合難有恐悦之儀故御普請場へも御用間之節ハ罷出度、且家来之者も差出度、且又屋敷ニ有合候竹木御用之御足ニ致度旨御用部屋江申立候処、奇特之儀江戸表へ可申上候。勝手次第可致旨半助被申聞候。

一、同断ニ付、屋敷ニ有之候竹木御用ニ相立度旨、村上孫兵衛、大羽弥兵衛、茂右エ門宅へ右兩人書付を以去ル朔日伺出候。則御用部屋へ申達、奇特之儀勝手

目次

題字「華山会報」元華山会理事
故小澤耕一氏

P ① 渡辺華山と訪舘録

大井教寛

P ② 田原藩義倉・報民倉③

石川洋一

P ⑥ 渡辺華山 初期の作品と

印章 後編 中村正子

P ⑫ 「偉人物語 渡辺華山」

読書感想文について

P ⑯ 公益財団法人華山会

田原市博物館からご案内



【表一】報民倉建築材料寄付者

(天保6年)

No.	月	日	氏名	材料	口上・書付	通番	天保8年役職
1	9	1	村上孫兵衛	屋敷二有之候竹木	書付を以	67	中小姓順席
2	9	1	大羽弥兵衛	屋敷二有之候竹木	書付を以	77	連紙格下目付
3	9	10	日高吉左衛門	有合之竹瓦	書付を以	72	連紙格代官
4	9	10	近藤三太夫	有合之竹瓦	書付を以	78	供中小姓下目付役
5	9	10	稲熊穂助	有合竹	書付を以	50	近習代官見習
6	9	10	塩谷武右衛門	有合竹	書付を以	71	連紙格代官役
7	9	11	松阪安兵衛	乍聊石	書付を以	73	連紙格蔵方改
8	9	11	岡田与治右衛門	乍聊石	書付を以	75	連紙格勝手廻り普請方中間支配
9	9	11	長尾助六	乍聊竹	書付を以	76	連紙格勝手廻り普請方中間支配
10	9	18	吉住右衛門七	聊の竹	書付を以	94	帳付
11	9	18	萱用源左衛門	寸莎藁	書付を以	41	給人格
12	9	20	山本雅兵衛	有合候竹少々	書付を以	98	連紙格祐筆
13	9	21	河辺甚右衛門	有合候竹少々	書付を以	68	中小姓順席
14	9	21	岡田森助	有合候竹少々	書付を以	84	中小姓順席右筆
15	9	22	鈴木五郎兵衛	有合候竹少々	伺書差出	61	中小姓
16	9	22	奥田広吉	有合候竹少々	伺書差出	82	供中小姓下目付役
17	9	24	浅野忠八郎	有合候竹少々	伺書差出	80	供中小姓
18	9	24	鞍馬増右衛門	有合候竹少々	伺書差出	79	供中小姓
19	9	25	玉置常右衛門	有合候竹少々	伺書付差出	45	納戸格蔵方
20	9	29	伴和助	有合候石少々	伺書差出	85	供中小姓
21	10	2	佐野麻吉	有合候竹少々	伺書差出	87	近習供中小姓順席
22	10	2	岡本久太夫	有合候竹少々	伺書差出	103	小屋頭、小屋頭次番
23	10	3	土井吉右衛門	有合候竹少々	伺書差出	64	中小姓
24	10	3	近藤助五郎	有合候竹少々	伺書差出	88	近習供中小姓順席
25	10	4	戸田熊蔵	有合竹乍聊	伺書差出	81	中小姓順席産物係
26	10	4	本多力蔵	竹少々	伺書差出	63	中小姓順席祐筆
27	10	11	市川茂右衛門	普請木、竹		6	用人
28	10	11	八木八右衛門	普請木、竹		9	用人
29	10	12	村上定平	有合石、竹少々		66	中小姓
30	10	12	鈴木弥太夫	藪板50枚		1	年寄
31	10	12	川澄又二郎	藪板50枚		2	年寄
32	10	12	真木重郎兵衛	藪板50枚		5	加判御勝手総元メ
33	10	13	齊藤寛吉	竹少々差上		40	給人格、納戸
34	11	1	河合清之介	竹少々献上		120	中小姓連紙ノ間幼年

〔御用方日記〕、「天保8年田原藩分限帳」による。通番は田原市博物館作成「天保8年家中席次」によるおおよその席次。

次第可致旨茂右エ門申達ス。最初の「一書き」は「：依之一統心得のため此段被仰出候」までは「御家中江被仰出之覚」の写しで、後半の「右之趣支配下へも：」からは用人の筆になるものである。ここから、次のようなことが推察される。義倉取立につき藩主自らが身辺で厳

しく儉約をし、そこで産み出された剰余を報民倉の元米や建設費用に下し置かれた。家中の者はどのような年でも飢渴に及ぶようなことはいないだろうが、少しの俸禄で家族の多い場合は、なかなか大変である。家中に対して特に藩主自ら身辺で厳しく儉約をし、そこで産み出さ

れた剰余を報民倉の元米や建設費用に下し置かれることを強調し、家中の者が常々捨ててしまうようなもの、神主が祈禱の時に用いる人形のようなものでも工夫して貯えていけば素晴らしいことと思し召されるであろう、直書も時々きちんと拝見し、御達の意図をありがたく心得るよう

要請している。

二つ目の「一書き」から、市川茂右衛門と八木八右衛門の用人二人は、御用の合間には普請の現場に出て、仕事の手伝をし、又家来の者も手伝いによこすようにしたい、屋敷地に生えているあり合わせの竹木も報民倉建築の足になるような物は差し出した旨を御用部屋に申し上げたところ、年寄（佐藤）半助は奇特なことで、進んで行ってくれ、その行いは参勤で藩主康直の滞在している江戸屋敷へも申し上げておくと云っている。

「御用人方日記」執筆者当人のことをわざわざ書き留めているのは不自然であるが、記録に残すことと家中への喧伝の効果を狙ったのではないか。

さらに、二つ目の「一書き」から「御直書」と「御家中江之被仰出之覚」が家中に席達された翌日九月一日、屋敷にある竹木を御用に役立てたいと中小姓村上孫兵衛、連紙格下目付大羽弥兵衛の二人が最初に用人茂右衛門宅へ願い出たことがわかる。さらに次のような申し出がある。

○竹木の寄進

そして、屋敷のありあわせの竹瓦を御用に役立てたいと次に用人茂右衛門宅に願ひ出たのは、日高吉左衛門と近藤三太夫二人である。

【天保六年九月十日】

一、此度厚思召を以報民倉御取立之儀、御役前ニおいてハ難有儀奉存、屋敷有合之竹瓦御用ニ差加度趣日高吉左衛門、近藤三太夫書付を以市川茂右衛門宅ニ伺出候ニ付、御年寄江申出候処、奇特儀江戸表へ可申上候、勝手次第可致旨被達右之通茂右衛門兩人江申達候。

一、右同断稲熊補助、塩谷武右衛門書付を以同人宅江差出是又同様勝手次第可致旨同人申達候。

厚い思召しをもって報民倉が建立されることは、自分の担当する役目の上からもありがたいことであり、屋敷に有り合せの竹と瓦を御用に差し加えてもらいたいと日高吉左衛門、近藤三太夫が書付を以て用人市川茂右衛門宅に伺ひ出てきたから、その旨、御年寄へ申し出た処、奇特なことだ、江戸表へ申し上げておく、

そのようにしなさいという指示を受けその旨兩人に伝達している。同日同じような申し出が書付をもって稲熊補助、塩谷部右衛門からも出されている。

【天保六年九月十一日】

一、此度厚思召を以報民倉御取立ニ付、御役前は勿論身分ニ取候而も難有奉存候ニ付、松坂安兵衛、岡田与治右エ門乍聊石、長尾助六乍聊竹、御用御差加ニ被仰付候ハ、難有之旨書付を以茂右エ門方へ差出候処、先ニ並合之通勝手次第可致旨茂右エ門申達候。

そして、翌十一日には松坂安兵衛、岡田与治右衛門がいささかなながら石、長尾助六がいささかなながら竹を御用に差加えに仰せつけてくれたら有り難いとの書付を茂右衛門方に差し出している。以後十一月一日まで【表一】のような建築資材の献上が続く。竹は屋根や壁の下地に組んで土を支えるこまいに使われ、工事の進捗状況に応じて、献上したと思われる。竹木等の寄進者は三十四人になるが、十月二日の岡本久太夫以外は御目見得を許された士分の者である。

る。

○米献上

献米については、「御用人方日記」には一部記されているだけだが、「報民倉寄付帳」記録がある。実際は金銭による献米であったかもしれないが記録上は粗米で納められている。最初の献米者は藩医中村玄喜で九月二十九日粗米二俵を献じている。一俵以上の献米者は二人にのぼる。

詳細は【表二】の通りである。年寄鈴木弥太夫の十二俵を頭に、同川澄又次郎、同佐藤半助、同渡辺登（華山）、加判勝手元ノ真木重郎兵衛の十俵、用人市川茂右衛門、同八木八右衛門の七俵であり、それ以下もほぼ身分に応じて献米している。さらに士分以下の者五九人の献米が記録されている。その内訳は小頭川澄織右衛門の二斗、他の小頭三人が一斗五升、他の五五人は一斗の献米である。献米の総合計は約一四〇俵、献米者八〇人である。「報民倉寄付帳」には、農民町民の米の納入の記載はない。武士金田丈左衛門の報民倉江納之納入証の日付は、天保六年十二月であるが、町人広中六太夫の粗米

三十俵の納入証の日付は天保八年十二月である。あるいは見つからない町人の納入証が存在するかもしれないが、報民倉の元米は藩主家計から捻出された二百俵と家臣団からの献米とでなっていると思われる。

最初に献米したのは九月二十九日医師中村玄喜二俵である。続いて十月六日渡辺華山十俵、十月二十九日目付役齊藤式右衛門五俵がある。十一月に入つて、十一月二日者頭雪吹伊織五俵、年寄佐藤半助十俵、同月三日取次格生田何右衛門三俵、同月四日用人市川茂右衛門、同月八木八右衛門七俵、同月十二日給人格小川岑右衛門三俵、同十五日側取次鈴木孫助三俵、また同十七日年寄鈴木弥太夫十俵、同川澄又次郎十俵、勝手元締真木重郎兵衛十俵とほぼ同じ地位の者同士が同じ日に同じ量の献米をすることが注目される。同月二十一日にも江戸の側用人二人が同日同量の献米をしている。報民倉設立の直接の担当者である村奉行は金田丈左衛門三俵【写真】、同大嶋祐左衛門五俵の献米であるが、代官三人日高吉左衛門、塩谷武左衛門、稲熊補

【表二】報民倉献米表

(天保)				(舂米)				(天保)				(舂米)							
No.	年	月	日	俵	斗	升	天保8年役職	氏名	通番	No.	年	月	日	俵	斗	升	天保8年役職	氏名	通番
1	6	9	29	2			医師	中村玄喜	42	41	6	11	21		1		元メ下役	井上雅藏	118
2	6	10	6	10			年寄	渡辺登(華山)	4	42	6	11	22	5			長柄奉行格	大嶋祐左衛門	14
3	6	10	29	5			目付役	齊藤式右衛門	24	43	6	11	22	3			用人	石川三藏	7
4	6	11	2	5			物頭	雪吹伊織	11	44	6	11	24	1			坊主	小原嘉三	193
5	6	11	2	10			年寄	佐藤半助	3	45	6	11	24	1			大工	三浦伝藏	124
6	6	11	3	3			取次格	生田何右衛門	22	46	6	11	24	1			地方手代	山田又藏	不明
7	6	11	4	7			用人	市川茂右衛門	6	47	6	11	24	1			地方手代	加藤牧右衛門	116
8	6	11	4	7			用人	八木八右衛門	9	48	6	11	24	1			地方手代	内山昌兵衛	127
9	6	11	12	3			給人格	小川岑右衛門	38	49	6	11	24	1			地方手代	鈴木文助	不明
10	6	11	12		2		小頭	川澄織右衛門	112	50	6	11	24	1			蔵方手代	太田源右衛門	129
11	6	11	12	1	5		小頭兼山目付	鈴木津右衛門	121	51	6	11	24	1			搦屋賄	大羽順助	153
12	6	11	12	1			足軽	今井源七	123	52	6	11	24	1			搦屋賄	川上庄右衛門	130
13	6	11	12	1			足軽 弓組	川澄弥作	168	53	6	11	24	1			搦屋賄	鈴木又一郎	131
14	6	11	12	1			足軽 鉄砲組	中谷幾右衛門	157	54	6	11	24	1			浜手代	山口平内	134
15	6	11	12	1			足軽 鉄砲組	浅野武右衛門	163	55	6	11	24	1			浜手代	小野梅治	135
16	6	11	12	1			足軽 弓組	矢田太五郎	174	56	6	11	24	1			浜手代	山田善兵衛	136
17	6	11	12	1			足軽 鉄砲組	八木兵藏	160	57	6	11	24	1			浜手代	奥田彦右衛門	137
18	6	11	12	1			足軽 弓組	立花八十藏	173	58	6	11	24	1			浜手代	杉浦半藏	138
19	6	11	12	1			足軽 弓組	岩本瀬兵衛	171	59	6	11	24	1			浜手代	光浦伝吉	139
20	6	11	12	1			足軽	鈴木金吾	不明	60	6	11	24	1			浜手代	原野民藏	140
21	6	11	12	1			足軽	林吉次	不明	61	6	11	24	1			浜手代	小崎喜久左衛門	141
22	6	11	12	1			足軽 鉄砲組	中神岩平	不明	62	6	11	24	1			浜手代	坪井茂七	142
23	6	11	14	1	5		小頭	井上平藏	不明	63	6	11	24	1			浜手代	近藤太郎兵衛	143
24	6	11	14	1			足軽 弓組	広中富次郎	175	64	6	11	24	1			山廻	佐野小兵衛	144
25	6	11	14	1			足軽 弓組	中神順次	170	65	6	11	24	1			山廻	井上半吾	146
26	6	11	14	1			足軽 弓組	鈴木孫次郎	176	66	6	11	24	1			山廻	山田仁左衛門	147
27	6	11	14	1			足軽 弓組	太田八助	177	67	6	11	24	1			山廻	下村弥左衛門	148
28	6	11	14	1			足軽	河合磯右衛門	158	68	6	11	24	1			和地村山廻	香田金兵衛	149
29	6	11	14	1			足軽 弓組	沢辺仁平	169	69	6	11	24	1			馬草山廻	八木周平	145
30	6	11	15	3			側取次	鈴木孫助	18	70	6	11	24	1			町廻	浅野儀兵衛	132
31	6	11	16	1	5		小頭	大羽宇右衛門	122	71	6	11	24	1			町廻	伴弥三右衛門	150
32	6	11	16	1			足軽 鉄砲組	伊藤安平	162	72	6	11	24	1			町廻	土井三弥	不明
33	6	11	16	1			足軽 鉄砲組	河合三次郎	156	73	6	11	24	1			町廻	慶徳七郎右衛門	152
34	6	11	17	12			年寄	鈴木弥太夫	1	74	6	11	24	1			船倉番	鈴木又右衛門	154
35	6	11	17	10			年寄	川澄又次郎	2	75	6	11	24	1			屋根師	山本権右衛門	155
36	6	11	17	10			勝手元締	真木重郎兵衛	5	76	6	11	24	1			元メ下役	土井作右衛門	126
37	6	11	18	1			旗奉行	三浦舎人	12	77	6	11	26	3			村奉行	金田丈左衛門	17
38	6	11	21	5			側用人	八木仙右衛門	8	78	6	11	27	1	5		給人格	萱生源左衛門	41
39	6	11	21	5			側用人	小寺大八郎	10	79	7	1	10	15			医師	雪吹龍保	医師
40	6	11	21	1			元メ下役	神谷孫右衛門	125	80	7	8	3	1			供中小姓	近藤三太夫	78

〔報民倉寄附帳〕「天保8年分限帳」による。なお「通番」は同分限帳により田原市博物館作成のおおよその席次である。
 田原藩では1俵は4斗2升詰。125俵+60斗+20升=139.8俵。

助は献米をしていない。
 足軽は、足軽小頭の一人が二斗、他の三人が一斗五升、足軽十九人が一斗の献米、下役人は元締下役、坊

主、大工、地方手代、蔵方手代、搦屋賄、浜手代、山廻、町廻、船倉番、屋根師など三十五人が一斗の献米である。なお献米の日付を見ると、足

軽はそれぞれの小頭と同一であり、小役人も三十五人がすべて同一の日付であるからそれぞれ同輩と相談し合って納めたと思われる。

写真は金田丈左衛門が舂米三俵を報民倉に納めたという田原藩からの受け取り証文である。

【写真】

一 舂米 三俵
 右報民倉江納之訖

天保六乙未年十二月

金田丈左衛門殿



報民倉印

渡辺華山 初期の作品と印章 後編

研究會員 中村正子

追記 「文晁画談」(文化八年)の一筆画の項に次のような記載がありました。



田安家二藏セラルル沈南蘋所画六枚折屏風有り 外装共二唐山ノ制ナリ 其内ニ海鶴延齡図アリ 其波清済貫河図ニ因テ画ケルモノナルヘシ 如此モノヲ画キ其間ニ波浪ノ皴ヲナセリ 予ガ見タルハ若年ノ頃ニテ唯奇ナル事ヲ画ケルトノミ思テ此事ヲ知ラス縮図ヲサヘセナリシヲ悔ユ

文晁が若い時に南瀨の「海鶴延齡図」に珍しい波形を見、縮図さえ取らなかつたことを後悔していると述べている文章ですが、文化十三年の華山の「海鶴退齡図」も南蘋の影響を受けた作品です。松平定信と文晁、文晁と華山、文政三年の「辛巳画稿」にある「写山楼呈楽翁老侯 登書」の菊の記載などから、華山は田安家のこの「海鶴延齡図」を参考に描いたのではないのでしょうか。「海鶴退齡図」に描かれている波形は文化十二年の「一路功名図」に描かれている波形と違うことにも興味を引かれます。「海鶴退齡図」は波形にも注目したい作品と考えられます。

印章	作品名	制作年	材質描法	寸法	款記	出典と作品番号
白文方形印 〔華山〕(現存 両面印)	維摩居士	文化11	紙本墨画	73.5×52.8	文化甲戌十二月十六日摸成 寓画齋摸本	定本67 中日13
白文円印 〔邊静〕	野鹿図	文化12	紙本淡彩	122.0×34.0	乙亥春正写于寓画堂東窓下 華山静	定本46 遺墨6 錦心17 中日14 田原46 豊橋7 常葉6
	(併印) 朱文方廓印〔寓画齋〕					
	一路功名図	文化12	紙本淡彩	128.0×33.0	乙亥春日写于寓画齋 華山	定本74 錦心19 中日15 師友21
	(併印) 朱文方廓印〔寓画齋〕					
	西王母図	文化13	絹本着色	25.0×41.0	丙子冬十月写于寓絵堂 東窓下 華山静	定本18 遺墨5 中日18 栃木12 田原43 豊橋12 常葉10 神髓8
	(併印) 朱文方廓印〔寓画齋〕					
	海鶴退齡図	文化13	紙本淡彩	132.5×45.6	海鶴退齡図 丙子孟夏 華山静写	錦心28 神髓9
	(併印) 朱文方印〔松窓〕					
朱文方廓印 〔寓画齋〕	野鹿図(白文円印〔邊静〕の項参照) 一路功名図(白文円印〔邊静〕の項参照)					
	竹鶏小禽図	文化12	絹本着色	126.0×54.0	文化乙亥晚冬写 華山邊静	定本45 錦心18 豊橋9 常葉7
	(併印) 白文長方印〔山水清音〕					

白文連印
〔邊静・子安〕

人物愛虎図	文化12	紙本淡彩	124.5×48.5	文化乙亥春日做馮象仙之図 華山静写	定本17	豊橋8	神髓6
(併印) 朱文亀甲印〔登〕					日本文人画II	14	
西王母図〔白文円印「邊静」の項参照〕	文化13	紙本着色	26.8×90.80	光琳法悦三十六歌仙一卷 文化丙子孟秋摸成 前摸 忽々不経意恐与元本違又 不可図者也 寓絵堂画本	定本20	豊橋11	神髓31
三十六歌仙図							
(併印) 白文小印〔華山〕後捺か)							
溪山尋秋	文化8	紙本淡彩	133.2×63.0	辛未春日 華山	錦心13		
歳寒二雅	文化9	紙本淡彩	137.0×36.7	壬申暮秋 華山	錦心15		
(併印) 白文方形印大〔華山〕							
唐山水図	文化11	紙本淡彩	150.0×44.0	文化甲戌初秋五日摹 寓画齐	定本1	中日11	栃木29
(併印) 朱文二重廓長方印〔全楽堂〕					田原56	豊橋3	常葉2
蘆汀双鴨図	文化11	絹本着色	103.0×36.8	文化甲戌秋九月晦日写于 寓画堂 華山邊静	定本44	豊橋6	常葉5
呂公釣渭図	文化13	絹本着色	25.0×41.0	丙子春三月十有六日為 高寫君写 華山静	神髓4	錦心27	中日17
芙蓉双鷺図	文化13	紙本着色	110.0×38.0	丙子晚夏辛辰華山静写	定本19	神髓7	
(秋汀白鷺図)					豊橋11	神髓7	
水飲山鳥図	文化13	絹本着色	107.2×37.3	丙子夏日華山静写	画譜	錦心26	中日19
(梅花山鵲図)					栃木11	古美術	
秋草弧鴨図	二十代前半か	紙本淡彩	103.1×22.4	華山静	定本58	豊橋10	常葉8
牡丹図稿		紙本着色	131.2×53.0	法暉正叔意婁東顧其復	定本59	中日25	豊橋28
(椿山所蔵のもの)					常葉38		
醉李白図	二十代前半か	絹本着色	111.0×47.0	臣登謹写	定本68	中日31	
佐藤一斎像	文政4	絹本着色	81.0×50.0	文政辛巳孟秋下澣受業弟子 渡邊登挥手敬写	定本29	錦心58	中日20
張仲景像	文政5	絹本着色	99.0×36.0	華山邊登拝写	栃木4	田原5	豊橋16
藤原惺窩像	文政6	絹本着色	105.5×35.9	水府所蔵狩野永納原図	師友2	神髓86	古美術
(癸未画稿にあり)					定本22	錦心75	中日30
飲馬図	文政7	絹本着色	75.0×45.0	文政癸未五月渡邊登謹摸	田原39	豊橋29	常葉18
名花十友図	文政9	絹本着色	120.0×41.0	甲申夏四月做趙松雪之筆意 製之然未知果似否 華山渡邊登 丙戌六月念二日写於全楽堂	常葉17	中日23	豊橋20
					定本69	錦心74	中日24
					定本48	錦心81	中日36

秋丹雙鷺図 文政年間 絹本着色 124.0×55.0
 白鷺遊魚図 文政年間 絹本着色 124.0×55.0
 牡丹図(双幅) 文政年間か 絹本着色 絹本着色
 窓下時快風從江上来真成
 赤脚覆層水 渡邊登
 臣渡邊登謹写
 臣登
 田原18 豊橋25 常葉37
 師友19 神髓12
 定本78 錦心145 中日32
 定本60 錦心146 中日33
 「華山會報」第50号
 (京都国立博物館蔵)

朱文方形印

一掃百態図 文政元 紙本墨画 264×195
 (併印 白文角丸方印「江戸乃人」)
 (淡彩冊子装)
 文政新元青龍宿戌寅仲冬望
 前二日 江戸華山渡邊登識
 定本42 錦心43 画譜
 中日82 栃木14 田原23
 豊橋15 常葉12 師友24
 神髓76 古美術

白文方形印大
 [華山]

歳寒二雅(白文連印「邊静・子安」の項参照)

朱文連印
 [邊・静]

傲古四時山水 文化14 紙本淡彩 134.5×70.3
 (併印 白文長方印「華山」)(六幅一連の内の②)
 是米仁画法也 華山傲其意
 于時文化丁丑春日於寓繪堂峻
 東籬傲骨 文化14 紙本淡彩 128.3×53.0
 東籬傲骨茲時丁丑冬看徐子仁
 秋兔之図其中菊花殊清妍因
 法其意 華山
 遺墨9 錦心36
 錦心30

坪内老大人像 文政元 絹本着色 149.9×73.5
 渡邊定静写
 文政新元秋八月十有八日
 定本26 豊橋14 常葉13
 神髓78

菊花雙雀図 文政元 絹本着色 49.8×53.7
 (秋草小禽図)
 文政新元秋八月二十日写
 於全樂堂 華山邊静
 畫譜 神髓10
 宋周元公濂溪先生像 文政3 絹本淡彩 87.5×33.5
 文政庚辰夏四月望写於
 全樂堂 華山登
 遺墨13 田原38
 備後公題桜 文政初期 絹本着色 90.9×54.5
 登謹写
 遺墨78

白文長方印
 [華山]

王羲之図 文化10 紙本着色 103.9×28.0
 文化癸酉夏日写于写物堂
 東窓下 華山
 遺墨2 神髓3
 傲古四時山水 文化14 紙本淡彩 134.5×70.3
 ①帆影半飛江水上 鐘声
 多在石林東
 遺墨9 錦心36
 ②是米友仁画法也 華山師
 其意 于時文化丁丑春
 於寓繪堂峻

(②は併印 朱文連印「邊・静」)

③清漂揚釣 華山静

朱文方印
〔松窓〕

蘆芙蓉双鴨図	文化年間	紙本淡彩	129.4×30.6	④丁丑晩春写 華山	
花禽	文政3	紙本着色	134.2×56.1	⑤華山	
(併印) 朱文亀甲印〔登〕 白文長方印〔摹古〕				⑥傲藍瑛筆意 華山	神髓5
雨宿(双幅)	文政年間	紙本淡彩	119.0×52.5	是南瀨沈氏画法也 華山師 其意 時文政庚辰二月朔於 全樂堂竣	遺墨29
(樹陰避雨之図)				渡邊登筆	遺墨29 錦心70 田原80
陶弘景聽松風	文政年間	紙本淡彩	96.7×27.3	陶弘景聽松風 登	遺墨27
海鶴退齡図(白文円印「邊静」の項参照)					

白文小楕円印

〔松窓〕

風雨泊舟	文化14	絹本淡彩	27.2×53.0	風雨泊舟 丁丑春日 華山	錦心38
牡丹	文政2	紙本墨画	16.0×44.8	己卯夏六月廿三適傲	日本文人画Ⅱ39・2
(併印) 白文長方印〔摹古〕				扇面画	(泉石清緑帖)
宋周元公濂溪先生像				錢舜舉 華山邊登	
(朱文連印「邊・静」の項参照)					

白文方印

〔華山〕

福祿寿図	文化10	絹本淡彩	151.3×71.2	文化癸酉晩冬 華山写	ベルリン美術館133
(併印) 朱文小瓢印〔登〕					
夏山欲雨図	文政3	紙本水墨	129.2×56.8	文政庚辰季夏法米襄陽 筆意 時迎総「房快風於 全樂堂竣 華山	錦心56 神髓34
(併印) 朱文長方印〔脳髓頭目〕					
調馬図卷	文政8	紙本墨画	28.0×700.0	文政乙酉晩穉写	スケッチ
(松前牧士曲馬図卷)					
飛雀	文政年間か	紙本淡彩	33.3×39.4	華山樵者登	錦心68
(併印) 朱文亀甲印〔登〕				華山人戲墨	

朱文亀甲印
〔登〕

野鹿図(白文円印「邊静」の項参照)					
人物愛虎図(朱方廓印「寓画齊」の項参照)					
花禽(白文長方印「華山」の項参照)					
飛雀(白文方印「華山」の項参照)					
牡丹金鶏	文政4か	紙本着色	129.7×48.8	華山	錦心22

	〔辛巳画稿〕にあり)			
蘆雁	文政6か	紙本墨画	94.8×36.4	法雪舟 登
	〔癸未画稿〕にあり)			錦心 72
月梅	文政6か	紙本淡彩	180.6×98.1	華山樵者登写
	〔併印 白文角丸方印「江戸乃人」			錦心 67
	〔癸未画稿〕にあり)			朱文長方印「全楽堂記」)

渡辺華山初期の代表作「亀台金母図」「関羽像」は後捺印と思われる「関帝像」は無印のため取り上げませんでした。

参考文献

- 定本 「定本 渡辺華山」 一九九一年三月 株式会社郷土出版社
 遺墨 「渡辺華山遺墨帖」 明治四四年三月 華山会
 画譜 「華山先生畫譜」 昭和三年八月 恩賜京都博物館編
 錦心 「渡辺華山先生錦心図譜」 昭和十五年五月 国書刊行会
 中日 「華山」 昭和三十七年十月 東京中日新聞出版局
 栃木 「武士と文人との間で 渡辺華山展」 昭和五九年二月 栃木県立美術館
 田原 「華山名作集」 昭和六十年十二月 愛知県田原町・田原町教育委員会・華山会
 豊橋 「渡辺華山展」 昭和六一年十月 豊橋市美術館
 常葉 「華山名品展」 平成元年十月 常葉美術館
 師友 「渡辺華山とその師友展」 平成五年四月 田原町博物館
 神髓 「渡辺華山の神髓」 平成三十年九月 田原市博物館
 古美術 「古美術」第70号 特集渡辺華山 昭和五九年四月 三彩新社
 日本文人画Ⅱ 「日本文人画展Ⅱ」 平成八年四月 静嘉堂文庫美術館
 ベルリン美術館 「ベルリン美術館3」 平成五年七月 角川書店
 スケッチ 「渡辺華山 スケッチとデザイン」 一九七一年五月 岩崎美術社
 文晁画談 「写山楼谷文晁」 一九七九年 栃木県立美術館

I 白文方形印 [華山] (兩面印)



II 白文円印 [邊靜]



III 朱文方廓印 [寓画齊]



IV 白文連印 [邊靜・子安]



① 朱文連印 [邊・靜]



② 白文長方印 [華山]



⑤ 白文方印 [華山]

白文方形印大 [華山]

V 朱文方形印 [華山]



③ 白文小楕円印 [松窓]

④ 朱文方印 [松窓]

白文長方印 [摹古]



* 朱文龜甲印 [登]

朱文小瓢印 [登]



「偉人物語 渡辺華山」

読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷

土の偉人渡辺華

山先生の功績を

後世に伝承する

事業の一環とし

て、毎年市内小

学六年生に対し、「偉人物語 渡辺華山」の冊子

をプレゼントしてまいりました。感想文の募集

を行ったところ、二七四点の応募をいただき、

最終選考において選ばれた二九点の中から最優

秀賞一点と優秀賞五点の作品をご紹介します。

いただきます。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を

いただきました各学校の先生方に厚くお礼申し

上げます。

公益財団法人華山会事務局



最優秀賞

偉人物語渡辺華山を読んで

田原市立福江小学校 六年 森本友菜

お母さんが、私に教えてくれました。

「二年生のころに習字で「かざん」と書いたものが華山会館にかざられたよね。」

と。くわしく話を聞くと、私の通っている習字教室で書いたものが、華山コンクールで入選して、華山会館にかざってもらえたので、家族で見に行ったそうです。私は忘れてしまっていたけれど、お母さんに写真と賞状を見せてもらいました。その話を聞いて、少し渡辺華山に興味をもち、「偉人物語渡辺華山」を読みました。

偉人とは、「すぐれた仕事を成しとげ、多くの人から尊敬される人」だそうです。渡辺華山は、今でも名前が残るすごい人なのだと思います。

この本には、渡辺華山の生まれたころから亡くなるまでのことが書かれていて、渡辺華山は、私と同じ年のころには大学者になるといふ志をもち勉学にはげみ、家族の暮らしを支えるために絵の勉強をしたそうです。私はまだ志もなく、ただ学校に行っ

てなんとなく勉強をしています。正直、勉強は好きではないですが、渡辺華山のように志や夢をもつことができれば、今よりもっと勉強にはげむことができ

るかもしれないと思いました。

この本を読んで、渡辺華山は自分よりも周りを思いやれる人なのだと思います。渡辺華山は貧乏な家庭に育ったので、人が困っていると自分のことのように考えてその人を助けたそうです。自分の着物をぬいで人にあげたり、飢饉の時にはごはんを減ら

して、その米を困っている人に与えました。天保七年に田原が飢饉になったときには、渡辺華山は家で療養中でしたが、田原にいる殿様へ「凶荒心得書」という書き物を届け、人々を助けようとしたそうです。それには、飢饉のときには、殿様や役人たちがどうしなければならぬかがくわしく書いてありました。私は、その中の「農民があるからこそ殿様があるの、殿様があるから農民があるのではあり

ません。」という考えがすごいと思いました。上に立つ人は、下の人たちに支えられているから、支えている人たちが幸せに暮らすことが出来れば国は発展していくと思いました。

渡辺華山は、最後は罪人として亡くなりましたが、人を憎み、世を恨むことはなかったそうです。生きていた間は、世間から評価されることはあまりなかったようですが、世界の事情をよく学び、日本の未来を心配する人でした。華山が亡くなって世の中が変わってからは、彼の偉大さが人々に知られるようになりまし

た。私は、この本を読んで渡辺華山という人物について初めて知ることができました。こんなに身近に素晴らしい人物がいたことを知って、おどろいたし、ほこらしく思いました。また、せっかく田原に住んでいるのだから、渡辺華山のことをもっと知りたいと思いました。まずは、渡辺華山が描いた田原の風景を見に行ってみようと思います。





わたし達のヒーロー

田原市立田原中部小学校 六年 野間 唯花

華山先生は、わたし達のヒーローです。華山先生は責任感が強く、人のために行動ができるすごい人だと思います。わたしは、人のためにうまく行動ができません。

「じゃまにならないかな。」と考えてしまい、行動にうつすことができないのです。なので、わたしも華山先生のように、人のために小さなことでもやりきれる人になりたいと思いました。

わたしは、華山先生が田原の民のために報民倉を建てたことにもおどろきました。華山先生は真っ先に自分の絵を売り、米十ぴょうをこの倉に寄付しました。そして、報民倉が完成した翌年に、大きな日本をおそいました。田原でも作物が育たず、うえ死にしような人がたくさんいました。しかし、華山先生の建てた報民倉のおかげで、田原でうえ死にする人はいませんでした。もし、華山先生がいなかったら、田原の人はたくさんうえ死にし、わたし達も生まれていなかったかもしれません。そう考えると、華山先生は、わたし達の命のおん人です。華山先生は、自分のことより、人のことを優先する、すてきな人だと思いました。先生は、この先起こりうることを考え、計画し、行動ができていました。わたしは、先のことを考えることができて、行動にできないので、華山先生はやはりすごいと思います。

華山先生は、外国の勉強や、蘭学についても学ん

でいました。しかし、蘭学者の一人にうその話を広められ、無実の罪でろうに入れられてしまいました。そのせいで、周りから悪い見方をされ、自分の仕えているとの様に迷わくをかけないようにと、自刃してしまいました。もし、うその話が広められなかったら、華山先生はきっと、田原の民のためにたくさん動いてくれたのに、とても悲しい最期でした。けれど、先生が残した書置きには、人をうらむようなことは書いておらず、責任を自分が負おうとしていました。との様に迷わくをかけないようにした姿からは、責任感の強さと優しさを感じました。

わたしは華山先生の生き方を知って、華山先生は、自分よりも人のことを大切にしていると感じました。また、わたしとはちがいで、行動にうつすこともできません。華山先生は、とても勇気のある、すてきな人だと思いました。わたしは、自分のできるところを考えることができても、なかなか行動にうつすことができません。なので、これからは、友達や他の学年の子がこまっていたら、思い切って声をかけたり、手伝ったりしたいです。小さなことから行動にうつしていきたいと思います。六年生は最高学年です。人がこまっていたらすばやく動きたいです。そして、

「さすが六年生だね。」
と思ってもらえるような六年生になりたいです。さらに、いろいろな学年の子たちからたよられるような、華山先生のような人になりたいです。

ぼくらのほこり

田原市立神戸小学校 六年 河邊 風流

ぼくは、渡辺華山とはどんな人なのか全く知りませんでした。六年の授業でくわしく話を聞く機会が

あり、そこで初めて知りました。華山先生の一生を聞くと、心の中でなみだが止まりませんでした。

華山先生は、大学者になるため、すいみん時間を三時間まで減らしたり、ほんのわずかな時間でも勉強を続けたりしていました。ぼくだったら、三日程度でやめてしまいそうです。毎日毎日努力を続ける姿がとても素敵だと思いました。

華山先生が二十六歳のときにつくった俳句が印象的です。

見よや春 大地も亨す 地虫さへ

これは、小さな虫でも春が来ればかたい大地をつきぬくように、人も努力を続けていけばいつか希望がかなう日が来るはずという意味です。ぼくは、この俳句でとても希望が持てました。努力を続けても、なかなかよい結果がでないこともあるからです。ぼくは、俳句を知り、とても前向きな気持ちになれました。

一方で、華山先生の家は八人家族でとても貧乏でした。そんなときに、華山先生は小さいときから得意だった絵を描いて、少しでもくらしをゆたかにするためにそれを売って生活をしていたと知りました。親や家族など、人任せにしてしまいそうところを、自分の力を生かそうとするのは、人に対する思いやりが強いからなのだと思います。

それは、幼いころからもそうだったと思います。華山先生が十二歳のときの出来事です。父のための薬を買って帰っていたときに、との様の行列に当たってしまい、家来達に親や弟妹の名前を聞かれました。その時、華山先生は、歯を食いしばって一言も声に出さず、がまんし続けました。家族を守るためにだまっただけで、自分だけがきずつくなんて、華山先生はとても心強いと思います。

華山先生の最期もとても印象に残っています。四十六歳のとき、罪人にされてしまい、何度も何度も悪口を言われました。けれども人に文句を言うこと

なく、人に迷わくをかけないように自刃したそうです。華山先生はそのことを、

「天を怨まず、人を咎めず」

と書き残したそうです。その言葉でぼくは、改めて、華山先生の人への思いやりや強い心を感じました。

ぼくは、華山先生のことを初めて知り、おどろくことが多かったです。その生き方から、むくわれなくても努力を続ける前向きさ、常に人のためにつくそうとする思いやりの心を学びました。

ぼくは今十一歳です。華山先生のような十二歳になれる自信はありません。でもこれから少しずつ、華山先生のような強い心をもてるように、日々を過ごしていきたいと思います。

「偉人物語渡辺華山」を読んで

田原市立赤羽根小学校 六年 平野 裕典

渡辺華山は生まれてからずっと貧乏で、人の苦しみや悲しみなどをよくわかって人です。人のためには、自分の苦勞や努力を惜しまず、決めたことを最後までやりとげるところが、すごいなあと思いました。

殿様の行列の先頭にぶつかってしまった場面が、とても印象に残っています。大きな手が登の顔にびしゃりときて、登は歯を食いしばって声を出しませんでした。それどころか、自分の殿様や父に迷惑がかかることを心配して、自分が殴られることを望みました。この頃は、手打ちにされても仕方がないとされていたので、ぼくだったら、怖さが一番にきて、聞かれたことには答えて、自分を守ろうとしてしまうと思います。

田原藩の武士たちが遊びに夢中になり、勉強しない人が増えていったりわがままし放題になってし

まったりしたときには、華山はそこに課題を見出しました。学問を積んでいないことと人の道を知らないことを関連付けて考え、教え広めるために自分が勉強しようとしたり、知り合いにたのんで勉強会を開こうとしたりしました。そんな自分の姿を見た父親が心配していることに気付く、人に心配をかけない別の方法を考えようと思いました。周りに目を向け、周りの様子に気付き、自分をふり返って考えた行動を改めたりするところを見習いたいと思いました。

一番すごいなと感じたところは、天保のききんの出来事です。書き表せないくらいたくさんのことを、華山はやつてのけました。田原藩の政治を立て直そうと借金を無くそうと考えて実行に移したり、農業の先生を招いて食用になるのりの研究をしたり、その先生に家を与えて長く住んでもらおうと工夫したりしていました。日本中の気候変動と不作を察知して、すぐに、殿様に直接話をして報民倉を作り、米や麦などを貯めて人々の暮らしの備えをしたらしました。そのおかげで、田原藩の人たちは誰一人として飢え死にしなかつたそうです。華山の行動力と実行力、華山の言葉を受け止める殿様、それらがあつて、人々の暮らしが守られているのだとわかり、ぼくもそんな大人になりたいと思いました。

華山が蜜社の獄で捕らえられた時に、多くの人たち華山を助けようとしたところからも、華山の人柄やそれまでしてきた功績の大きさがよくわかります。

ぼくは、華山のように、勉強したり、苦手なことを頑張ったりすることができません。だから華山のようにはなれないと思います。でも、家族や友だちのことを大切に思う気持ちは負けません。まずはできることから、取り組んだり、自分で決めたことをやる努力を続けたりして、身近な大切な人たちを守って幸せにしていきたいと思います。亡くなっ

たおばあちゃんが言っていた「継続は力なり。」

という言葉に胸に、華山のように、人のために努力し続けられる人になりたいです。

「偉人物語渡辺華山」

田原市立童浦小学校 六年 藤城 映

私は、渡辺華山の本を読んで絵の才能のすごさに興味をもちました。

華山先生の絵といえ、身近にあるお菓子の包み紙を思い浮かべます。気になって調べてみると、その絵は重要文化財にも認定されている「一掃百態図」というものでした。この絵から、当時の人々の暮らしがよく分かりました。

次に、華山先生が描いた田原市の風景に目を向けました。本でさまざまな絵を見ました。その中でも特にすごいと思った絵は、現代の伊良湖町にある「小山の鼻」という絵です。墨一色で、描かれている絵は、墨の濃淡だけで人の動きがよく表わされていることがとてもすごいと思いました。華山先生の絵は、細かいところまで描かれていてすごいと思いました。

ほかにも、報民倉について調べてみました。報民倉とは、困ったときに領民を救うための倉という意味でした。華山先生は、絵を売って真先に、お米を十俵寄附をしていたそうです。一俵は、約六十キログラムだそうで十俵寄附をしたということは、約六百キログラムと知りびっくりしました。お米などをみんなが寄附をして全部で百二十四俵で七千四百四十キログラムあつまったそうです。こんなにあつめられるなんてすごいと思いました。それに、田原だけうえ死にする人が一人もでなかつたから江戸

ばくふに表彰されていてすごいなと思いました。

次に、魚屋を助けたところに興味をもちました。華山先生は、困っている人に必要なだけお金をかしてあげていてそのあとに、お金を返しに来た人に魚と一緒にお礼をしてもらっていたのでそれだけ、華山先生のやさしさがよく伝わってきました。けど、そのお金で魚を買って、買った魚もあげていたのでびっくりしたし、すごく人が良いと思いました。それだけではなく、困っている人には自分のごはんを減らしその人にあげたり、着ている着物をあげ、自分はボロボロの着物を着ていても平気だったなんて、とても感心しました。

自分におきかえて考えてみました。私は、みんなに物を分けたり、使っている物をあげたりすることをしなくてはいけないと頭では、理解しています。けれど、実際にその時が来たら、自分のことを優先してしまいそうです。また、分けてあげられたとしても、お礼をしてほしくなったりしてしまう自分がいて、とてもはずかしいです。だから、華山先生のことを尊敬します。これからは、少しでも華山先生の生き方をまねできるようにしたいと思います。

華山先生は、国を開こうとしても考えが新しく、認められなかったけれど、現代では、たくさんの人々が尊敬できるともすごい人です。特に田原市では、今でも先生を付けて呼ばれるほどでしたわれています。華山先生のことについて勉強したいと思います。

すてきな心の持ち主・華山先生

田原市立神戸小学校 六年 福井 歩 奈

華山先生のごことは、五年生になったところに父と観ていたテレビで知りました。けれど、そのときは名

前だけを知っただけで、どんな人かはまだわかりませんでした。そんなとき六年生で華山先生のお話を学校で聞くことができました。その話を聞いて、すてきなところがたくさんある人だと思いました。

私が華山先生をすてきな人だと思ったところは家族を大切に思い、いつでも家族のことを考えて自分にできることを見つけようとしているところです。夜になって雪が降り始めたので、お母さんのために湯をわかしていたところでは、家族を自分の宝物のように感じていたことがわかりました。大人になっても家族のことを一番に大切にすると、そんなすてきな大人になりたいと思いました。

また、すごく感動したエピソードがありました。それは、大雨や大風でお米や野菜がとれず日本が困っていたときのことでした。華山先生は、農民が飢え死にはいけないと、いざというときのために食料をとっておこうと考えました。お殿様にその考えを伝え、お殿様が「報民倉」という倉を建ててくれることになりました。それは農民にも広まり、全員が協力した倉には、たくさんのお穀物が集まりました。

「農民があるからこそ殿様があるので、殿様があるから農民があるのではありません。」私の心にこの言葉が強く残っています。これは、「凶荒心得書」という書き物の中のものだそうです。いくら力のあるお殿様でも、その生活やお殿様を支える人々がいなければ、お殿様も貧乏になってしまいます。華山先生は、農民のためにいくら自分がとっても大変なことをしたとしても、「この人たちがいなくなったらどうするのだ。」という心優しい気持ちがあったのだと思いました。

さらに、華山先生の勇気や責任感にも驚きました。それは、外国の船が日本人をのせて日本に近づいてきたとき、その船をうちはなそうという人がいて華山先生はそのことに対しての反対する文章を

書きますが、よく思わない人もいて殿様に迷惑がかかるかもしれないと、自刃により命を落としました。

華山先生のことを知って、私は自分の考えをしつかり伝えて、いつもそばにいてくれる人を大切に、どんなことをしたらみんなに笑顔届けられるか、考えられる人になりたいです。それに大人になっても、「ありがとう」の気持ちを伝えたいです。

「天を怨まず、人を咎めず」

この言葉は、私の心にぐっとさざりました。自分は何もしていませんという意味だと思えます。どうしても、私は何もしていませんのにと、すぐに思ってしまうところもありますが、そんなときも、その人の気持ちを考えて感じ取れるようになりたいと思います。華山先生のように、素敵なお心の持ち主になりたいです。

入選

清水 陽太	高橋 航佑	小久保 結芽
池野 心遥	藤井 心都	伊東 日葵
杉本 莉理	片山 穂花	岡本 賢治
藤江 琶子	杉浦 里咲	鈴木 朱梨
河合 藍	大羽 利依	小久保 樹
森山 湊斗	畑下 桜愛	森下 なつ
宮川 隼輔	白谷 美波	伊東 愛真
岩田 晃一	小久保 唯人	

(受賞された方は除く)

公益財団法人華山会
田原市博物館 からのご案内

田原市博物館展覧会のご案内

十二月二十四日(日)

企画展

「川瀬巴水―荒井寿二コレクション―」
(企画展示室)

荒井寿一氏のコレクションは、川瀬巴水の初期作から晩年作までの版画作品に加え、本の装幀、挿絵や絵はがきなどのグラフィックデザインが含まれる充実したコレクションです。

川瀬巴水(一八八三―一九五七)は大正・昭和にかけて活躍した版画家です。生涯にわたって日本全国を



秋山愛三郎著・川瀬巴水画『旧都名勝記 SIGHTS OF OLD CAPITAL』挿絵

旅し、新版画の代表的な画家として世界的に高い評価を受けています。

本展では、荒井寿一氏のコレクションを中心に、愛知県美術館のコレクションを交えながら、「旅情詩人」とも称された巴水の生涯と画業を辿ります。

十一月三十日(土)〜令和七年二月九日(日)

企画展

華椿系画家たちの絵画学習―下絵・粉本・手控帳―(特別展示室)

絵画を描く前に画家たちは下絵を制作し、どのような構図や図様を描くか試行錯誤していました。また画家たちは古い絵画を見たり、写したりすることで、画技を深めていました。

本展では、華椿系画家が残した下



椿椿山「玉堂富貴図画稿」

絵・粉本・手控帳より、いかに絵画を学んでいたかをご覧ください。

二月十五日(土)〜四月六日(日)

ひな人形と初風展(企画展示室一)

田原の旧家に伝わったひな人形や田原風保存会制作の初風を展示。

同時開催…華椿系画家の花鳥風月(特別展示室)

花鳥風月とは、自然の美しい風景のことを指します。本展では、華椿系画家たちが描く花や鳥などの作品をご覧ください。

観覧料

企画展 川瀬巴水

- 一般 七〇〇円(五六〇円)
- 小中生 三五〇円(二八〇円)

企画展以外

- 一般 三〇〇円(二四〇円)
- 小中生 一五〇円(一二〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金
東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポート提示で入館無料。
休館日 毎週月曜日(祝日の場合はその翌平日)、展示替日、年末年始

(公財)華山会から

講座「渡辺華山を知るために」
毎月十一日午前九時から
華山・史学研究会会員募集中
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。
渡辺華山史跡巡りガイド養成講座
毎月一回程度
申込場所 華山会館事務室

華山会報 第五十三号
令和六年十一月十一日発行
編集発行 公益財団法人華山会
理事長 鈴木 愿
常務理事 林 勇夫
事務局長 大根義久
〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江二二の一
TEL 〇五三二・二二・一七〇〇
FAX 〇五三二・二二・一七〇一

編集協力 田原市博物館
華山・史学研究会
会長 鈴木利昌
※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 令和七年四月十一日